

アウトサイダー・アートが福祉の世界に投げかけるもの

—— ある受賞者のライフストーリーを通して ——

杉田 穂子

〈要旨〉

「アウトサイダー・アート」の展覧会において優秀賞を受けた、自閉症で知的障害があり会話表現が困難な三十代の男性について、そのライフストーリーを両親の語りや職員の手記から再構成しつつ、本人の問題行動に対する複数の教育現場や入所施設における異なった取扱いを比較し、また、その芸術表現の価値が広く認められるようになった過程とその後の本人の行動の変化を記述することによって、特別な才能をもつ知的障害のある人に対する教育・福祉現場の従来の実践に対し、異分野の美術界の運動であるアウトサイダー・アートが投げかけるものを考察していく。本人は、これまで仲間に対する暴力という問題行動を起こしてきたが、これを、言葉では伝えられない不安感や作品を邪魔されずに制作する場が確保できない環境要因に起因すると見抜き、規則や集団管理を超えて個別に対応することの出来た教育現場や入所施設では問題行動が少ないことがライフストーリーの上で示されている。また、本人の芸術表現の価値を見出したのは、美術に精通した入所施設職員であったが、その展覧会出品に向けた粘り強い本人への働きかけの努力と受賞後の評価が、これまで固い殻に閉じこもっていた自閉症の本人の行動を今までよりも開かれたものにしている。以上のライフストーリーは、アウトサイダー・アートを含め他分野からの新しい価値観を取り入れることが、教育・福祉の現場における、より質の高い支援を考えていく上で重要であることを示唆している。

キーワード：アウトサイダー・アート、知的障害、自閉症、問題行動、ライフストーリー

1. はじめに

近年、「アウトサイダー・アート」という新しい名の下に、知的障害のある人たちの作品が展覧会などに出品され、高く評価されるという動きが広がっている。アウトサイダー・アートの制作者たちは、芸術教育を受けていないにもかかわらず、はっきりとした独創性をもった作品を生み出しているが、それはどのようにして可能となったのだろうか。また制作者である障害のある人たちは、評価されるために作品を作っているのではな

く、どのような評価や賞賛にも無関心であるとされている。しかし作品が評価されるということは、なんらかの変化をその人の生活にもたらすのではないだろうか。そして福祉の枠内で見ているだけでは得られない、障害のある人への新しい見方を提示してくれるのではないだろうか。

本論文では、アウトサイダー・アートによって作品を評価され、優秀賞を受賞した自閉症で知的障害のある一人について、その両親の語るライフストーリーを追いながら、それらのことを考えていきたい。

2. アウトサイダー・アートとは何か¹⁾

アウトサイダー・アートとは、正規の美術教育とも、美術界のメインストリームともまったく無縁に、独自の方法と発想によってつくりだされている芸術をさしている。現在の日本のアウトサイダー・アートの火付け役となったのは、1995年に結成されたエイブル・アート・ジャパンであると言われている。1990年頃から知的障害のある人の表現をサポートしようという活動が各地で芽生えていき、播磨靖夫（財団法人たんぼぼの家、奈良市）によってひとつのネットワークに束ねられ、エイブル・アート・ジャパンが結成されている。ホームページ²⁾によると、エイブル・アートとは「障害のある人たちの表現をきちんと評価する、そして障害のある人たちの表現を通して、現代に生きる私たちが忘れてしまった感性を呼び覚ますというもの」「『できない』とされていた、障害のある人たちの『できる』という視点から捉え直す。できないことばかりをみるのではなく、もっている可能性に焦点をあてていく。そして、障害のある人たちのアートを＜可能性の芸術＞としてとらえると同時に、障害のあるなしにかかわらず、すべての人の可能性をみていく」とされている。このような経緯からアウトサイダー・アートでは障害者の作品が多く紹介されているが、本質的な意味でアウトサイダー・アートと障害者のアートは同じではない。2004年には、絵本作家はたよしこらが中心になり、滋賀県近江八幡市にボーダレス・アートミュージアム NO-MA が設立されており、そこでは障害のある人となない人の垣根を取り払ったアートが展開されている。最近はさまざまな場所でアウトサイダー・アートの作品の展示会が開催され、福祉関係者だけでなく、美術関係者や一般の人にも衝撃と感動をもって受け入れられている。

日本においてアウトサイダー・アートに関心が寄せられたのはこれが初めてではない。古くは1938年、千葉県・八幡学園の山下清を世に知らしめた「特異児童作品展」（早稲田大学大隈講堂）が知られている³⁾。この展覧会は、戸川行男（当時早稲田大学心理学教室講師）により開催された。戸川は当時非常勤講師として早稲田大学文学部の心理学教室の指導をしていた臨床心理学者内田勇三郎に「おもしろい施設があるから」ということで連れられたのが八幡学園の最初の訪問であったという。その後、クリスマスの日に出会った学園児童の作品に感動し、とくに山下清の作品へのそれが戸川を八幡学園にのめり込ませ

る原因となり、ついには「特異児童作品展」という展覧会のプロデュースをするまでになる。この展覧会は、安井曾太郎、梅原龍三郎、北川民次といった画家だけでなく、谷川徹三、小林秀雄など哲学者や文芸評論家を巻き込む美術史上の一大事件であった。しかし山下が放浪の旅にでて行方知れずとなり戦争の勃発もあって流れが断ち切られてしまった。1954年、放浪先から見つけ出され、再び注目を浴びた山下絵画を支援したのは、精神科医・式場龍三郎であり、展覧会の会場に「知的障害者の教育相談所」などを併設したことに見られるように、障害者教育の色彩が濃くなり、美術界的な文脈から遠ざかってしまった。

また1946年、糸賀一雄、池田太郎、田村一二らによって開設された滋賀県・近江学園での造形活動の優れた取り組みも、知的障害のある人たちの優れた作品が紹介され注目を集めた⁴⁾。中でも1954年から近江学園にボランティアとして出入りするようになった八木一夫の取り組みは、芸術家として優れていただけでなく、障害のある子たちの表現を見抜き、それを引き出す指導者としての力量を備えていたという。当時の学園職員が語る八木の粘土指導とは、「子供が自分から粘土に近寄ってくるまで、絶対に無理に粘土をさわらせてはならない」「ものを造ることをおしつけてはならない」「子供たちが造っているときに口をだしてはいけない」というものであった。このような滋賀県の造形活動や作品は、展覧会「土と色」展という形で確立し、京都府、滋賀県の知的障害をもつ人たちの造形活動とその作品を伝える展覧会として開催されていった。主催は京都府知的障害者福祉施設協議会、滋賀県知的ハンディをもつ人の福祉協会、京都新聞社会福祉事業団であり、1981年から18年の長きにわたり隔年で10回開催された。一旦終了したが、2006年に第11回として再開し、復活以降も隔年で開催され、2012年3月には第14回が開催されている。タイトルはスタート当初の10回は「土と色 ちえおくれの世界」であったが、第11回以降は「土と色 ひびきあう世界」となっている。このように近江学園の活動は広がりを見せ、社会的に認められるようになっていったが、それは主催がすべて福祉関係者であることからわかるように福祉の世界に留まっているといえる。

1990年代からのアウトサイダー・アートの動きは、絵本作家はたよしこ、田島征三らの積極的な関心・介入により、再び美術界の人たちを巻き込んだという点で、新しい動きとなっている。特に2004年に滋賀県近江八幡市に開設されたボーダレス・アートミュージアムのNO-MAは、滋賀県の造形活動の流れを汲みながら、当初は滋賀県下の障害のある人の作品の常設ギャラリーを作ることが設立理念にあったが、多分野に渡る関係者からなるワーキンググループでの検討の結果、障害のある人もない人も巻き込んだアートという新しい展開の方向性が示されている。NO-MAの事業の一つに、施設合同企画展があり、施設の職員からなる実行委員会が主体となって企画・運営するものがあるが、参加をする施設からは1名ないし2名の実行委員が推薦され、この実行委員として推薦されて出てきた職員には美大出身の若い世代が多く、福祉と美術の専門性を超え、また障害のある人もない人も巻き込んだボーダレスなアートという新しい展開をみせている。

ヨーロッパでは、このような芸術は「アール・ブリュット」(Art Brut 生の芸術)と呼ばれている⁵⁾。スイス・ローザンヌ・アール・ブリュット・コレクションのペリー館長によると、アール・ブリュットの作者たちとは、「文化的な刷り込みや社会慣習から免れた創造者たち」であり、「芸術教育を受けていない」にもかかわらず「新しい題材、図像、スタイル、テクニクを使った表現を構築」し、「はっきりとした独創性」をもっている作品の制作者である。さらに彼(彼女)たちは、「孤独の中で密かに匿名のまま制作」し、「誰かに作品を見せる気もなく、名声を望んでいるわけでもない」また「自分たちが創造的な活動をしているということすら知らない」と述べている。アール・ブリュット概念の誕生する背景には、1900年ごろヨーロッパ全体に広がったプリミティヴィズムの影響があるとされている。つまり伝統からの解放の必要性を感じ、新しい手掛かりや価値の模索が始まっていたのである。1945年、フランス人画家のジャン・デュビュッフェは、主に精神病院を回る旅の中で、演劇を主題としたアロイズの作品、アドルフ・ヴェルフリの架空の音楽作品、ジャンヌ・トリピエの霊媒的な作品など、多くの優れた芸術作品を見出し、その後もコレクションの収集に務めた。1949年には有名な画廊主、ルネ・ドゥルーアンがパリでアール・ブリュットの展覧会を催した。アルベール・カミュ、ポール・エリュアール、ジャン・コクトー、アンリ・ミショー、クロード・レヴィ＝ストロース、トリスタン・ツァラなど、作家、詩人、芸術家、民族学者などの関心を集めた。デュビュッフェはこの展覧会のカタログに「文化的な芸術よりも、生の芸術を」と、題した文書をアール・ブリュットの宣言として世に送った。自ら集めたコレクションの行く末を心配したデュビュッフェは、1971年5000点に上る作品をローザンヌ市に寄付した。それらの作品は1976年に初めて一般公開され、以来30年以上に渡り、世界中から美術館を訪れる人が絶えない。

デュビュッフェによるアール・ブリュットの基準とは、芸術的教育を受けていないこと、独自の創作および表現手法をもつこと、独特で一貫した表現システムを作品にとりいれていること、文化に依存していないこと、自給自足の制作を進めていること、受け手の不在、どのような文化的評価や賞賛にも無関心であることである。精神病院や障害者施設で生み出されたものが必ずアール・ブリュットと見なされるわけではないが、実際はそのような場で制作されたものが多数みられる。また先ほどのペリーは重要なキーワードとして、3つのS、つまり沈黙、秘密、孤独(silence, secret, solitude)を挙げている。

日本のアウトサイダー・アートでは、知的障害のある人たちの作品が多く、ヨーロッパのアール・ブリュットでは精神障害のある人の作品が多いという違いがあるが、近年、この二つの動きはつながりをもちはじめた。2008年～2009年にはスイス・ローザンヌのアール・ブリュット・コレクションにおいて日本のアウトサイダー・アートの特別展である「JAPON」が、2010年～2011年パリのアル・サン・ピエール美術館において「アール・ブリュット・ジャポネ展」が開催されている。

3. Sさんのライフストーリー

(1) 両親が語るSさんのライフストーリーの概要

Sさんは、国内の展覧会で賞をとり、前述のスイスやバリの展覧会で作品が展示された人の一人である。筆者が特にSさんに興味をもったのは、Sさんの作品の解説には次のような文章があったからである⁶⁾。

「彼の作品が発見されたのは施設の職員によってであった。入所当初の彼は理解困難な存在であったという。そこに、彼の描く連続模様の美しさに心魅かれた…女性職員が丹念に歩み寄り、薄皮を剥ぐようにして彼の表現の謎を1枚ずつめくりはじめたのだ」

この文章を読んで筆者は、どのようにして理解困難であった彼の表現の謎をめくることができたのだろう、作品が評価されてから彼の生活に変化はなかったのだろうか知りたいと感じた。本来はSさんにお話を伺いたかったが、会話が困難なため、Sさんの人生を身近で見て来られた両親にSさんのライフストーリーを伺った。またその際Sさんの制作現場も見学させていただいた。Sさんは現在30代、D知的障害者入所施設で生活をしている。

Sさんは、生まれた時には特に異常はなくミルクの飲みも良かったが、1歳半を過ぎても言葉はなかなか出なかったとのことである。2歳からは通園施設に通い、5歳から地域の保育園に通っている。その保育園は運動中心で、母親によると「その時は一番輝いていた」という。

小学校は普通学級に入るが、後に特別支援学級へ移る。その後小学校5年の時に、父親の仕事の関係で転校した。転校先のA特別支援学級では「暴力ふるって人をたたいたり、蹴っ飛ばしたりする癖が出て」きたため「養護学校しかない」ということでB特別支援学校（2007年以前は養護学校という名称であったが、本論文では特別支援学校を用いる）へ移籍している。移籍したB特別支援学校では寄宿舎での生活になるが、「いい先生がいらした…その先生が、『すごい描いてるよ』」とSさんの才能を最初に見つけた教師との出会いを経験している。

学校を卒業後、Sさんは、C入所施設に入る。そこは、「なじまなかった」「…暴力ふるうから…園長先生自らも、『ウチで引き取ってくれねえか』って言われた」というほど不適応であった。その後再び父親の転勤のため、D入所施設に入る。ここで職員のTさんにあう。「ここにきて、専門の人がついて…ここでは、よく（問題行動についても）話し合ってるみたいだから、なぜそうなったのか」とSさんが適応している様子が語られた。

Sさんは4つの学校、2つの福祉施設を経験していることになる。その中でも特徴的なのは、転校後のA特別支援学級では不適応であったが、B特別支援学校では適応し、また

C 入所施設では不適応であったが、D 入所施設では適応しているということである。同じ S さんはなぜこのように周囲の環境によって変わってしまうのだろうか。両親の語るライフストーリーからまず教員・職員の対応を中心に読みとっていきたい。

(2) 2つの学校場面

まず、2つの学校場面、A 特別支援学級、B 特別支援学校からみていこう。母親は、A 特別支援学級に通っていたころについて次のように語った。なお、インタビュー中の()は、インタビュー内容をわかり易くするために筆者が補足したものである。

「(転校したので) 環境違うと慣れないで、…暴力ふるって人をたたいたり、蹴っ飛ばしたりする癖が出てくる…暴力というより、もう自分が思うとおりにできない、今までやったのとは違うでしょ…学校が違ふと。そうすると…気に入らないから、人をたたいたり蹴ったりする…特別学級にいたころは、結局慣れないから、大変だっというので…養護学校しかないってなった」

最後には、A 特別支援学級では引き受けられないと言われ、B 特別支援学校に移籍することになる。B 特別支援学校では、生活の場も寄宿舎になり、環境的には大きな変化があったが、ここでは「いい先生」に出会っている。その教師は S さんが暴力的になる場面を、不安だからと理解し、抱きかかえる対応をしている様子が母親から語られた。

「なんかいい先生がいっぱい、あの不安みたいなのが…出てくるっていうのがわかってくださって…よくこう、抱きかかえるようにしてね、不安な、暴力的になるんじゃないかな、とか、分かるもの…『S 君、S 君』って、こうやって抱きしめるみたいにしてくれ」

この教師は、S さんが制作好きなことを理解し、制作のための場所を設けて、その作品について高く評価していた。次のように母親は語った。

「子どもたちが…描きたいとか塗りたいとか、…制作する場所、その時にその B の施設だとあったんですね。そういう部屋が。…施設の…寝れるところもあるけれども…そこでこう自分なりに描いてました。…そしたらその先生が、『S 君の作品をね、壁にかけてね、…見せてみて』って親たちに言うんですよ。…『すごい描いてるよ』って言われたんですよ。…その先生は、もう先見の目っていうか…あったんでしょうね。私たちはなんなんだろうな、と思っただけ」

このように S さんは自分の心の状態を理解してくれ、また好きな制作を認めてくれる教師に出会い、学齢期は安定した生活を送ることができた。

(3) 2つの入所施設

しかし、18歳になり入所したC施設で生活を始めたSさんは再び暴力をふるう人としてしか捉えられないようになる。母親は以下のように語った。

「学校終わってからそこに入ったんです…そこでなじまなかった…(4、5人の相部屋の)子どもを、(Sが)みんな早い話がおいだしちゃって、自分一人になっちゃった…暴力ふるうから。…自分の部屋で描くと、(個室ではないので)…子どもたちが、チョロチョロチョロチョロするのが、…邪魔っていう感覚が確かにあった…でもC施設…ちょっと暴れるとね、…どっかの部屋に閉じ込めてたって、この間(別件で)事件になりました」

制作をしたいSさんにとって相部屋の人たちは、制作を邪魔する存在でしかなく、暴力をふるってでも追い出したい存在であった。施設側はそのようなSさんの行動を問題行動として捉え、その罰として閉じ込めるという対応をしていた。父親は以下のように語った。

「(当時のC施設の)園長先生自ら(に)も…『うちで引き取ってくれねえか』って言われたことがある…1ヶ月にいっぺんぐらい父母の面接日ってのがあった。とにかく行ったんびに…暴れてどうのこうの、あそこの物壊したとか、この壁に穴あけたとか、行きたんびに言われるんですよ。…また今日も行けば言われるのかなっていう形になるんですね…学校に通って…寄宿舎にいる時には、そんなに暴力ふるってどうのこうのってあんまり聞かなかったけど」

園長は問題行動の激しさから家での引き取りを申し出ている。そして、問題行動を自分たちのケアとは関連づけず、Sさんの行動のみを問題行動としてとりあげ、親に報告している。そのような施設の対応に対して父親は次のように語った。

「親から言えば、あんたらが、…障害者の身になって、その子どもたちの心をつかむような形で接すれば、絶対にそんなことないんだけど、親とすれば分かるわけですよ。」

両親は、C施設の関わりは、Sさんの心をつかんでおらず、障害者の身になっていないと感じていた。このような時、偶然にも父親の転勤で、SさんはD入所施設に変わることになる。変わってからの様子を母親は次のように語った。

「ここに来て…専門の人がついて、…やっぱりある程度慣れない時は、もう大変みたいなんだけど、慣れると…なんともなくなって…ただ暴れてどうのこうのっていうのは…2回ぐらい言われたかな」

このようにD施設に移ってしばらく慣れるとSさんの暴力は減ってきている。その原因として父親は次のように語っている。

「なぜ暴れるのかわからない、そこさ行かないとさ、やっぱり分からないの、やっぱり何か言いたいことがあるんだろうけど、なかなかうまくしゃべれない何かがあるから…ここ（D施設）では、よく話し合ってるみたいだから、なぜそうなったのか」

そしてD施設でもはじめは二人部屋であったが、現在は一人部屋になった経緯について母親は次のように語っている。

「2人入ってたんですよ。…けどもSの作品に…いたずらしたりするっていうので、…作品をいたずらされちゃだめだって、そして違う部屋に移ったみたい…それでSが1人になって」

このようにSさんはC施設と同様に一人部屋になったが、そのために暴力をふるう必要はなく、むしろSさんの作品にいたずらをする相部屋の人が別の部屋に移るということで解決している。Sさんが今の施設に満足している様子を父親は次のように語っている。

「向こうにいる時（C施設）は、『さあ、（C施設に）S帰るよ』って言うと、しょうがねえ帰るかっていうような感じだけど、今は1泊2日で…もう（D施設に）帰る日になると、自分からもう帰るもんだとばかり思ってる」

(4) 職員Tさんとの出会い

SさんがD施設に適応していった過程には、D施設の方針もさることながら、職員Tさんとの出会いが大きな影響を与えていると思われる。ここでは両親の語りとともに、Tさんの手記も参考にしながら、どのように「彼の描く連続模様の美しさに心魅かれた…女性職員が丹念に歩み寄り、薄皮を剥くようにして彼の表現の謎を1枚ずつめくりはじめた」のかを追いたい。母親はTさんの関わりについて次のように語っている。

「（Sは作品をだれにも）あげない。秘密主義。…そういう感じだったんですね。…手放したのは、Tさんだけ。全然私たちには、1枚も置かないです。…ウチにも来て描くけれども、…絶対ウチには置きませんでしたね。…なぜ手放したんでしょうね。…Tさんがすごくよかったんだと思うんですね。自分は、Tさんと、その接している中で、なんかすごく心地よい何かを感じて、ああこの人だったら、まあ手放してもいいかな、っていう感覚になって、私手放したと思うんですよ。…やっぱり信頼、何か手放してもいい信頼関係みたいのができたんだかなんだか分かんないんですけど。ちょっと私は、それはできなかった。」

母親が自分もできなかったと語る T さんと S さんのかかわりとはどのようなものだったのだろう。T さんは福祉職員であり、同時に知的障害のある人の生み出す作品の世界に興味をもっていた人で、そのような活動を支える協会にも参加していた人である。T さんが、S さんとの当時の関わりの様子を書き残したものが出版されている⁷⁾。少し長くなるがここではその一部を紹介する。T さんは S さんの作品を「につき」と呼んでいる。

「につき」を初めて見た時、その量のすごさとただならぬ雰囲気から何ともいえない緊張感を受けた…まわりの支援者だけが知る存在ではもったいないという気持ちが強く働いた…私は公表する、たとえばどこかの展覧会に出展するという新たな経験が彼の生活にとっても何らかのプラスになるのではないかと考えた…

まず、T さんが最初に S さんの作品をみて感じたのは、「まわりの支援者だけが知る存在ではもったいない」という気持ちであった。

…「につき」の出展を計画してから意識的に彼の部屋を訪れ、嫌がらない範囲で作品を見せてもらうことを続けた…これらの方法は失敗に終わった…そこでちょっと発想を変えてみた…「につきちょうだい」「いいよ」というやり取りを意識的に加えた。2週間ほど経ったある日…「につきちょうだい」と言う…一枚を私に手渡してくれた。…しかし、展覧会までまだ時間があり…できることならありのままの状態、つまり綴り紐で綴られた状態で出品したいという気持ちが抑えられず、もう一度働きかけ…簡単な言葉とジェスチャーで伝えた。すると綴りから5センチ程度の束をはずし、新たに一束の「につき」の綴りを作り、小さなクリアケースに入れ、手元に残った綴りを綴り直して元の場所にしまった。…返却を求められたらすぐに応じられるように、「につき」の綴りをいれたクリアケースは彼の近くの部屋に保管した。約3時間後、彼の様子が落ち着かなくなり、やっぱり「につき」の綴りを要求…渡してもらった綴りから半分だけを返して様子をみた。…それ以上は何も言わず、普段どおりに過ごした…果たしてこれを展覧してよいものか迷った。しかし新たな経験を獲得することが、彼の今後の生活に必ず生かされることを信じて出展することに決めた。

S さんの作品を出展しようと決めた T さんであったが、その道のりは平坦なものではなかった。しかし T さんは、様々な方法で接近し、ついには「5センチ程度の束」を手渡されるようになる。こうして出展された作品は優秀賞を受賞した。さらに S さんの作品を深く知りたいという気持ちが S さんの作品をすべて解説するという方向に向かわせた。

展覧会に出展する取り組みの過程で…日記の束であることははっきりわかった。しかし文字や数字のようなものが何段階かに分けて書かれていること、彼の名前が書かれていることくらいしか理解できなかった。…2ヶ月ぐらい経ったころ、文字が書かれていると思われる部

分をなぞって「にっき」の内容を聞いてみると、彼が「1月3日、天気晴れ、4度」と読んでくれた。…紙を裏返し、同じように指でなぞると、「きょうはラジオ体操をやりました…」と次々に答えてくれた。…彼が読み上げてくれる文章は「にっき」に書かれた内容そのままではなく、本人の頭のなかにはいつている文章を言っているのだろうと想像した…ところが、最初の出展から1年経過したころ、…ほんやり彼の「にっき」の写真を眺めていたところ、その連続模様の部分が「ました」という文字に見えたのだ。模様ではなく、全部文章だった！…「にっき」制作中の彼に、改めて一文字一文字ゆっくりなぞって問かけると、はっきり全部読み上げてくれた。すべての文章の最後が「ました。」で終わっているから、連続模様にもえたのだ！…この時ほど、興奮したことはない。ここで、はっきりと彼の「にっき」の全容がわかった。

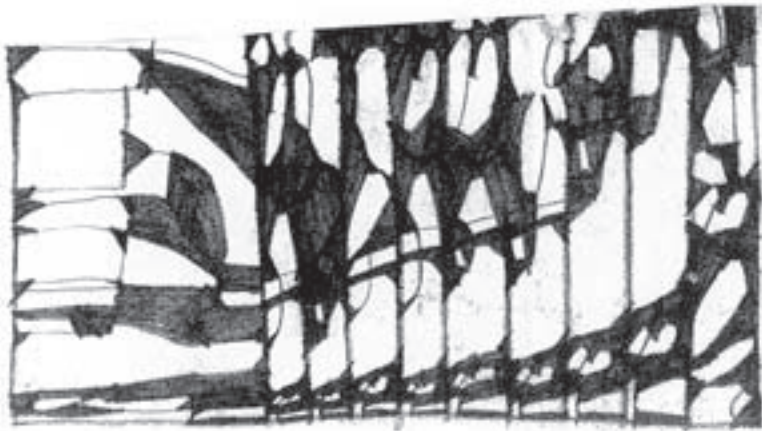


図1 Tさんの解説した「ました。」の連続模様 [Sさんの「にっき」(部分)]

このようにTさんは丁寧にSさんに近づき、作品を受け取り、長い時間をかけて眺めるうちに、ついにはSさんの作品の全容を解説した最初の人となった。その底流には、Sさんの作品に対する深い想いを読みとることができる。

(5) 出展後のSさん

このように作品を職員のTさんによって見出され、出展したことはSさんにどのような影響を与えたのだろうか。母親は次のように語っている。

「すごいもんだなあ、と思いました。…この間も、〇〇に行って、…みんなの作品があって、…みんなの中のSの作品というとなあ、なぜか『あーいいね』って。…この前…Tさんと一緒に(Sの作品を展示している展覧会に)連れて行った…受付のこう通っていくとね…『入場者の方のお名前をお願いします』なんて(言われて)、Sが、1人トットトットと行って、何やるのかな、と思ったら、自分の名前『〇〇〇〇』って漢字で書いてね。…分かってたん

だなあ、と思ってね。…自分の作品なんか見て…インタビューなんかもされたんだけど…本人も、なんか満足そうな顔をして…『握手』なんて言って…Tさんも、『あれ、あんなして握手って、手出して初めてだ』とかって言ってたけど…小学校のころは、全部そういうの日記書くたって…書けなくて…書かせようと思って一生懸命…でも…今ね、こういう…作ってますね。それに賞までいただいて…いまだにそうやって描いてるのすごいなと思う。…よく続けたもんだなーっていう」

母親は出展されているSさんの作品について、「いいね」と評価している。そして展覧会会場の受付で名前を記入できるSさんの言語理解の力、インタビューをされ満足そうな顔に喜びを感じ、インタビュアーに手を出して握手していることに驚いている。そして小学校から自分とやってきた日記を発展させながら模様のように制作しているSさんの継続力を評価している。

Tさんは出展後のSさんについて次のように記している。

…さまざまな変化があった。「につき」の制作の様子を取材したいという要請が増えた…初めての取材で彼が我慢できた時間は10分程度…「バイバイ!!」という言葉で、終了を求めるサインをだした。しかし回を重ねるごとに、彼が取材に応じられる時間が長くなっていった。…取材者が彼の「につき」を認めていること、彼自身に支援者とはまた違う形で真剣に向き合ってくれることを感じるからではないかと思われる。…そして部屋を訪れると、「につき」を手渡してくれた。このように自ら「につき」を預けてくれるケースまで出てきた…いまの現在の概念で、「一般」と言われる社会とはちょっと違う構造で、行動したり表現したりすることがある知的障害のある人たちが、ほかの誰かと出会うとき、彼らの作品は、彼らのアートは間違いのない出会い方を提供してくれる貴重なツールではないか。確信に近いカタチでこう思っている。

4. Sさんのライフストーリーから学ぶこと

(1) 問題行動とは何か。

Sさんのライフストーリーから特徴的であったのは、教育・福祉の現場の暴力行為への対照的な対応の仕方である。A支援学級、C入所施設では、他の利用者を殴るというSさんの行為を、Sさんの引き起こす問題行動であるという見方をしている。その見方によれば、Sさんは暴力的な人であり、他の場所に移籍してもらえない人であり、罰として閉じ込めるという対応をすることになる。しかし、父親が「なぜ暴れるのかな…そこさ行かないとさ」と語るように、なぜ暴力をふるうのかを考えることが支援への手がかりになるのである。B特別支援学校の先生は、Sさんが暴力的になるのは、不安や言葉で伝えられないストレスからだとして理解し、抱きかかえる対応をしていた。そしてSさんが制作

好きなことを理解し、制作できる場所を設けることが対処法であると気付いていた。

また2つの入所施設での対照的だったのは、Sさんが一人部屋を獲得するまでの過程である。C入所施設では、Sさんを相部屋の人たちに対して暴力をふるって追い出す暴力的で規則の守れない問題行動のある人として捉え、罰を与えていた。結果的にSさんは一人部屋を手に入れるが、それは施設側としては規則に反するたいへん困ったことであり、園長は家での引き取りを申し出ている。一方でD施設では、Sさんは一人部屋を得るために暴力をふるう必要はなく、むしろSさんの作品にいたずらをする相部屋の人が別の部屋に移るということで解決している。そこには、規則を超えて、作品を大切にしたい、だれにもさわられたくないというSさんの願いを周囲の職員たちが共有していることがわかる。Sさんの願いを共有すると、自然と他の人を別の部屋に移しSさんが一人で制作する場を設けるという対処法がとられることになる。

河合隼雄は「問題児」を「問題を起こす子ども」ではなく「われわれ大人に問題を提出しているのだ」と述べている⁸⁾。一見他の利用者への暴力行為にみえる行動も、B特別支援学校やD入所施設のように、暴力の原因は言葉で伝えられない不安感や、一人で制作できる場を確保できない環境要因からくるのだと解釈できれば、Sさんを抱きしめたり、一人で制作できる場を提供するというSさんの周囲の環境を調整することでSさんの暴力行為は減少している。しかし教育・福祉の現場は、効率化のため集団管理が必要とされ、そのため規則を守らせることが重視されることが多い。そして教師や職員は規則に反すると表層的に問題行動だと見なしがちである。しかしそれでは問題は解決しないことをSさんの事例は教えてくれている。大切なのは、暴力行為は周囲の環境が作り出しているのではないか、暴力行為が激しければ激しいほど、その裏には、別の強い願い（例えばSさんであれば作品を制作したいという想い）が隠されているのではないかという見方で障害のある人たちの行動を受け取る目、つまり河合が言うように「問題行動はなんらかの問題を自分たちに提出しているのだ」と捉える目をもつことであると思われる。

(2) アウトサイダー・アートの価値観を通してSさんの作品をみること

しかしSさんのライフストーリーから学べることは問題行動への対処法だけではない。アウトサイダー・アートの価値観を通してSさんの作品をみる職員Tさんの支援の豊かさからも大いに学ぶべきことがあると思われる。TさんはSさんの作品を見て先ず「まわりの支援者だけが知る存在ではもったいない」と感じている。つまりTさんは、Sさんに対して、作品を制作している間だけ静かにしている障害のある人ではなく、多くの人にみてもらう優れた価値ある作品の制作者として敬意をもった目で眺めている。Sさんの作品を出展しようと思ったTさんであったが、その道のりは平坦なものではなかった。しかしTさんは、自分の作品を手放したくないというSさんの気持ちに寄り添いながら、しかし出展するという「新たな経験を獲得することが、彼の今後の生活に必ず生かされる」はずだという確信を捨てずに、どうにか出展までこぎ着けている。そして、その過程でS

さんの作品の全容を解説した最初の人となった。その底流には、この優れた作品を多くの人に見てもらいたいというSさんの作品に対する深い想いを読みとることができる。その結果、SさんもTさんに対して、「につきを手渡す」というように、これまでの他の人にみせなかったような信頼を寄せている。Tさんがこのようなかわりをした背景には、Tさんがアウトサイダー・アートに深い関心をもっていたこと、そして時代がそのようなアートの存在に気づき、その価値を認めていたことが挙げられるだろう。

ここで重要なのは、誰かがSさんに教育・訓練をして絵を描かせ、その結果、賞を受賞したというのではないということである。そうではなく、Sさんが表現したそのままの作品を、周囲の人が優れたものであると認め、出展、受賞という形をとりながら、ひろく社会に認められていったことである。そのことによって両親はもちろん、施設の職員、アウトサイダー・アートの関係者はSさんに対する見方を変えている。そのことでSさんは、「取材に応じられる時間が長くなっていった」り、インタビュアーと「握手」をしたり、Tさんに「につきを手渡す」など、Tさんや周囲の人を広く受け入れるようになっている。アウトサイダー・アートという価値観を取り入れること、つまり他分野からの新しい価値観を取り入れることでSさんの生活世界は広がりをみせている。

5. おわりに

SさんとTさんの関わりの記録に照らせば、心から敬意をもってその人とその人の作品を眺め続ける関わりは、自閉症という障害そのものをも揺るがすような変化を産む可能性を示している。自閉症が、親の関わり方のまずさといったような環境要因から生じるのではなく、脳の機能障害であることは、現在の研究動向においては常識になっている。しかしSさんのストーリーからは、多くの自閉症の人たちは、うまく言語表現できないことによって社会から二次的、三次的な不適切な働きかけを受け、そのことが自閉症の人たちの心をさらに深く閉ざしているのではないかと思われてならない。Sさんもだれにも自分の作品を見せない、あげないという固い殻を作っていた。そのような人が心を開くのは、本人や本人の作り出したものを心から尊重するような特別に丁寧なかかわりをされた時なのであって、他の利用者と同様の規則を守らせることを重視するような平等なかかわりをされた時ではない。美術の分野からアウトサイダー・アートに興味をもった絵本作家のはたよしこは、福祉現場に入り込んだ時、次のような「大きな壁」を感じたという⁹⁾。

私は、作品に魅かれ右も左も分からず、とにかく現場に潜り込む思いで飛び込んだわけですが、私自身が福祉の中で暴れるには大きな壁を感じました。それはなにかといいますと…平等主義というものでした。…福祉の中では特に弱い立場の人たちが福祉的な処置を受けているわけですから弱い者たちの中でまたしても差別化することにはたいして抗議が相当私には降ってきました。相当たじろぎましたがそこで考えなければならぬのは人間は一人

一人違うということです。…でも福祉現場からの見方というのは、一所懸命平等に頑張っているわけだから作品も評価すべきという逆風でした。しかし実際に人が持っている能力というのは違って当たり前で、絵を描くことがとっても大好きで熱心に描いていても、やはり現れてくる作品は人の心を攪乱するほど打つ力を持っているものとそうでないものというのは当然あるわけですね。そこところはそうだと初めから認めるしかないわけですね。そうでないと実際アール・ブリュットの強いメッセージは生まれてこない訳でして、そこを誤解、混同しないように私たちは受け取るべきだと思います。

福祉に長く携わってきた専門家と言われる人たちは、長いが故に、「人間は一人一人違う」「人が持っている能力というのは違って当たり前」という根本的なことを忘れ、日常的な施設の規則が守られているか、問題行動がないかなどに目を奪われがちである。激しい暴力の裏には叫びたいほどの強い願いや要求が隠されているのではないか。平等主義、集団管理主義がもたらす利点と弊害は何か。規則はなんのためにあるのか。規則と個人の願いのどちらに重点をおくのかを常に検討していく柔軟さをもっているか。さまざまなことを問い返す必要性をSさんの事例は示してくれている。

Tさんは「知的障害のある人たちが、ほかの誰かと出会うとき、彼らの作品は、彼らのアートは間違いのない出会い方を提供してくれる貴重なツールではないか」と述べているが、筆者も全く同感である。今後もアウトサイダー・アートのような福祉以外の分野から障害のある人に対する新しい見方、価値観を積極的にとりいれていくことが、より質の高い支援を考えるうえで重要であると思われる。

本論文を作成するにあたりまして、制作を見学させていただいたSさん、インタビューにご協力いただき論文の掲載にもご理解をくださったSさんのご両親に感謝いたします。またインタビューの手配やさまざまな資料提供してくださったD入所施設の職員の方々、Tさんに感謝いたします。またこのような貴重な研究の機会をあたえてくださった大野先生をはじめプロジェクトのメンバーの皆様に感謝いたします。ありがとうございました。

引用・参考文献

- 1) はたよしこ、浮上しはじめた日本のアール・ブリュットたち、はたよしこ編著、アウトサイダー・アートの世界－東と西のアール・ブリュット－、紀伊国屋書店、2009、pp.16-25
- 2) <http://www.ableart.org>
- 3) 三頭谷鷹史、宿命と闘った画天使 山下清と沼祐一たち、名古屋造形芸術大学 名古屋造形芸術短期大学部 紀要第11号、2005、pp.27-39
- 4) 山田宗寛、それは滋賀から始まった…、代島治彦編、第8回全国障害者芸術・文化祭滋賀大会記念図録集「アートはボーダレス」、第8回全国障害者芸術・文化祭滋賀大会実行委員

- 会、2009、pp.314-21
- 5) リシャヌ・ペリー、大極間の電気ショート、はたよしこ編著、アウトサイダー・アートの世界－東と西のアール・ブリュット－、紀伊国屋書店、2009、pp.26-33
 - 6) ボーダレス・アートミュージアム NO-MA 編、アウトサイダー・アートの作家たち、角川学芸出版、2010、p.30
 - 7) 前掲書6)、pp.132-7
 - 8) 河合隼雄著、子どもと学校、岩波新書、1992、p.7
 - 9) 北岡賢剛、齋藤誠一編、アール・ブリュット・コレクションとボーダレス・アートミュージアム NO-MA との連携事業報告書、特定非営利活動法人はれたりくもったり、2009、p.39

Potential Contributions of Outsider Art to the Field of Social Services: Through the Life Story of an Award-Winning Artist

Yasuko SUGITA

This paper focuses on an autistic man in his thirties with intellectual disabilities and verbal communication difficulties who recently received an award for excellence at a local exhibition of “Outsider Art”, a Japanese equivalent of l’Art Brut in Europe. Reconstructing the subject’s life story through interviews with his parents and published personal notes recorded by a staff member at his current institution, the paper compares the responses of various schools and institutions to the subject’s problem behaviors, describes the process through which his art received wide public recognition, and examines subsequent changes in his behavior. Through this, the study examines the impact of the Outsider Art movement on conventional practices in the fields of education and social services for exceptionally talented people with intellectual disabilities. The subject’s life story reveals that his problem behaviors, such as physical aggression toward his peers, decreased when he was in educational and institutional settings that responded to his special needs rather than imposing strict rules and collective management, and that recognized the root cause of these behaviors as stress due to difficulties with verbal communication and the lack of a secure place to create uninterrupted. It was an artistically oriented staff member who recognized the value of the subject’s art. This person’s persistent efforts to persuade the subject to submit his work in a public exhibition and the acclaim that followed receipt of the award helped the subject to emerge from his autistic shell and become more open. On the basis of this life story, the paper proposes that learning about and introducing fresh perspectives from other fields such as the Outsider Art movement is important for improving the quality of support provided by schools and institutions for people with intellectual disabilities.

Keywords : Outsider Art, intellectual disabilities, autism, problem behaviors, life story
